

平成10年度

多文化共生の社会を目指した国際理解教育

— 多文化講師と共に創る学習活動を通して —

川崎市総合教育センター 国際理解教育研究会議

多文化共生の社会を目指した国際理解教育

— 多文化講師と共に創る学習活動を通して —

国際理解教育研究会議

下村 佳史¹
林 英和²

鈴木 睦子²
甲斐 修⁶ (平成9年度)

黒木 徹³

佐藤 拓⁴

要 約

今日、人種や民族・国籍の違いを越えて、それぞれの個人がもっている特性や身につけてきた文化の違いをお互いに認め合いながら、尊重しあって生きることができるような社会の実現が一層求められている。中教審の答申の中にも、その子ならではの個性的な資質を見だし、創造性などを伸ばしていくような個性尊重教育の大切さと、それぞれの個が互いに尊重しあいながら生きていく、他者との共生を目指した教育の重要性が述べられている。

本研究は、多文化講師（外国人講師）と共に創る学習活動を通して、多文化共生の社会で必要と思われる資質や能力、態度の育成を図ろうとするものである。多文化講師との授業を単発的なイベントで終わらせることなく、なるべく継続的に実施することにより、テーマの深化を図ることとした。その結果、『共生』についての意識の高揚や異文化へのステレオタイプの気づきなどが研究の成果として浮かび上がってきた。また、学習プロセスの大切さが、あらためて確かめられた。

この試みは、多文化講師にとっては、授業での文化紹介の他、マイノリティとして自らの意見を発表できる場として期待も大きく、自身の有能感を感じることができたものと思われる。

日本人教師にも、国際感覚の高まりや、外国・外国人に対する意識に変化が感じられた。

今回、多文化講師は外国人講師に限定したが、これからは外国人に限ることなく日本人の方も含めた取り組みの中で研究をさらに進めていきたい。

キーワード：国際理解教育，共生，多文化共生，多文化共生理解，多文化講師，学習段階

目 次

I 主題設定の理由	6	【授業実践例1】	9
1. 研究の意義	6	【授業実践例2】	11
2. 研究の仮説	7	【授業実践例3】	15
3. 研究の方法と計画	7	III 研究の成果と課題	19
II 研究の内容	7	1. 研究の成果	19
1. 多文化共生理解という視点	7	2. 今後の課題	20
【研究の構想】	8	おわりに	20
2. 多文化講師と共に創る学習活動	9	参考文献・指導助言者	20
3. 文化接触から見た学習段階	9		

¹ 川崎市立南菅中学校教諭（主任研修員）

² 川崎市立東柿生小学校教諭（研修員）

³ 川崎市立東高津中学校教諭（研修員）

⁴ 川崎市立子母口小学校教諭（研修員）

⁵ 川崎市総合教育センター指導主事

⁶ 川崎市立今井中学校教頭（前川崎市総合教育センター研修指導主事）

I 主題設定の理由

1. 研究の意義

(1) 「生きる力」と国際理解教育

21世紀に向けた教育のあり方を審議した第15期中央教育審議会は、その答申の中で国際化の状況に対応し、次の3点を提言している。

- ① 広い視野をもち、異文化を理解するとともに、これらを尊重する態度や異なる文化をもった人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
- ② 国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること。
- ③ 国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。

この内容からは、「個性尊重教育」の大切さと、それぞれの個が互いに尊重しあいながら生きていく「他者との共生を目指した教育」の大切さ、そして「コミュニケーション能力の向上を目指した教育」の大切さが読みとれる。今後の国際理解教育の在り方を考える上での方向性を示しており、いかに具現化していくかが研究会議の課題でもある。

「生きる力」を人間としての実践的な力とし、「自らを律しつつ、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性」、「自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力」であるとすると、国際理解教育はその実現に大きく寄与する可能性をもつものと言えるだろう。

(2) 多文化共生社会を迎えて

交通・通信等の手段の発達に伴い、人・物・情報等の移動が加速的に進んでおり、国際的な相互依存関係が強まっている。そして、外国企業の進出や外国人労働者の急増・難民の受入れ等により、わが国に存在する外国人の数は急増している。

平成10年5月1日現在、川崎市立小・中学校、高校に通っている在日外国人は26か国662人で全児童生徒数の約0.9%を占めている。中でも、韓国・朝鮮人（在日を含む）350人（構成比52.8%）が最も多く、次いで中国人（台湾を含む）135人（20.3%）、以下ブラジル63人（9.5%）、フィリピン47人（7.1%）、ベトナム14人（2.1%）ベルー12人（1.8%）などと続いている。こうした現状の中多様な民族と共に学んでいくことが、ごく自然な状況になりつつある。日本社会は、異なる文化をもち、異なる生活習慣をもつ人々が混在する社会へと変わってきた。

このような社会においては、従来の「異文化を理解する教育」を進めることでの対応は難しくなりつつある。

これまでの異文化理解という考え方は、マジョリティとしての日本人とマイノリティとしての外国人との間にはやや距離が置かれて、時には対立的な感覚さえあった。そのため、理解という言葉の意味するものも、単に異質なものの存在を認めるに過ぎなかった面がある。

また、民族や文化の違いを強調しすぎるあまり、違いをマイナスと見なし、差別や偏見を助長してしまうという問題も見られた。

しかし、今日、複数の文化が共存・共生していくためには、複数の文化の重なり合いを受入れながら、多文化共生の考えをもつ必要がある。

(3) 「多文化共生」と「多文化講師」

多文化共生社会における「共生」とは、民族的文化的な背景を異にする人々が共に協力、共存していくことを意味する。互いに干渉しない単なる「棲み分け」ではなく、「人間的な関わり」がそこには必要である。それぞれに個としての確立があり、それぞれが互いに認め合い協力していく。時には、利害がぶつかり合う場面に遭遇し、摩擦やトラブルがあるかも知れないが、それを乗り越えたところで共生社会への認識が深まってこよう。

佐藤学氏は、著書『学び合う共同体』の中で、「学びの交換を実現する〈協同的学び〉を教室に保障し、そこで展開される学びが学校の内外の多様な文化的・実践的共同体との連帯を築き上げる方向で促進される必要がある」と述べ「学びの共同体の構築」を提唱している。

この共同体への希求意識を子供の中に育てていくためには、単に書籍やTVなどを通じた理解では難しい。多文化講師との学びをはじめとして、体験を通した〈協同的学び〉を実現することで、共生としての生き方がより意識化できるのではないかと考える。

今こそ、こうした多文化共生の考えの中で地域社会や新しい地域文化を創造していくことが求められており、文化の多様性・価値観の多様性等を受入れられる寛容な心と、他者を認め、尊重するような態度を育てていくような教育が望まれているのではないかと。

これらの資質や態度の育成を図ることは、これからの多文化共生社会に生きる子供たちに必要であると捉え、その具体的アプローチの一方法として地域に住む外国の方を多文化講師として招請し、共に学習活動を創っていくことを考えた。

多文化講師と共に創る活動を通して、異なる文化と接することの楽しさと難しさ、日本の豊かさと貧しさ、異なる国とつきあっていくことの大切さ等を自らの感覚で感じ取ってもらいたいと願っている。

そこで、研究主題を次のように設定し、授業実践とその考察に力点を置いて研究を進めることとした。

多文化共生の社会を目指した国際理解教育
—多文化講師と共に創る学習活動を通して—

2. 研究の仮説

これまでも「開かれた学校」を目指して、各学校では地域に住む人々の力を教育の中に生かす試みが数多く実践されてきた。しかし、国際理解教育の実践を見ても、イベント的な交流で終わってしまうことが少なくなかった。単に、イベント的な交流では講師の話聞くなど受け身的な活動が中心になってしまいがちで、共感的な理解を得ることは難しいと考える。

一方、外国語教育では海外からの外国語指導助手（ALT）の導入が活発になってきて、言葉の学習を通して共生が図られている。

そこで、国際化が進展して、国や民族等の接触到広がりが見られる時代における国際理解教育に関する理論と実践研究は、どのように進められるべきなのかを探究すべく、次のような仮説を設定した。

多文化講師と共に創る学習活動は、国際理解教育を日常的・具体的に実施する上で、一つの効果的方法となるだろう。

多文化講師と共に創る学習活動を、積極的かつ継続的に取り入れることにより、児童生徒の『共生』についての意識を高めることができるだろう。

3. 研究の方法と計画

【1年目】文献及び授業実践から探る。

- 多文化共生を目指した国際理解教育の視点
- 文化の接触から考えた学習段階
- 多文化講師と共に創る学習活動の有効性と留意点

★平成9年度検証授業の取り組みと概略

- [検証授業1] 中学校3年英語科（1時間）
- ・主題 「近隣文化としての韓国とハングルを学ぶ」
 - ・講師 韓国女性
 - ・視点 他者文化理解・他者理解
 - ・段階 「知る」
- [検証授業2] 小学校1年道徳・国語（1時間）
- ・主題 「外国のあいさつと異文化理解」
 - ・講師 バングラディッシュ人女性
 - ・視点 他者文化理解・他者理解
 - ・段階 「触れる」「親しむ」

[検証授業3] 中学校2年社会科（1時間）

- ・主題 「日本と世界の結びつき」
- ・講師 インドネシア人男性
- ・視点 他者文化理解・他者理解
- ・段階 「知る」

[検証授業4] 小学校6年社会科（1時間）

- ・主題 「世界の中の日本」
- ・講師 フィリピン人女性
- ・視点 他者文化理解・他者理解
- ・段階 「触れる」「親しむ」

【2年目】1年目は単発的な実践が中心であったが、2年目は継続的かつ総合的な授業実践を試みる。

○多文化講師との計画的な事前打合せと事後の反省

○子供の問題意識のつながりを重視した総合的な学習単元の組み立て

★平成10年度検証授業の取り組みと概略

[検証授業5] 小学校3年総合的な学習（4時間）

- ・主題 「世界はともだち」
- ・講師 モンゴル人夫婦
- ・視点 自己・他者文化理解、多文化共生理解
- ・段階 「知る・親しむ・認める・行動する」

[検証授業6] 中学校3年総合的な学習（2時間）

- ・主題 「民族の生き方に学ぼう」※
- ・講師 韓国女性
- ・視点 多文化共生理解 ※2年連続実施
- ・段階 「知る」「解決する」 対象学級は違う

[検証授業7] 小学校3年総合的な学習（1時間）

- ・主題 「世界のともだちのために」
- ・講師 日本人男性（日本ユニセフ協会職員）
- ・視点 多文化共生理解
- ・段階 「知る」「行動する」

II 研究の内容

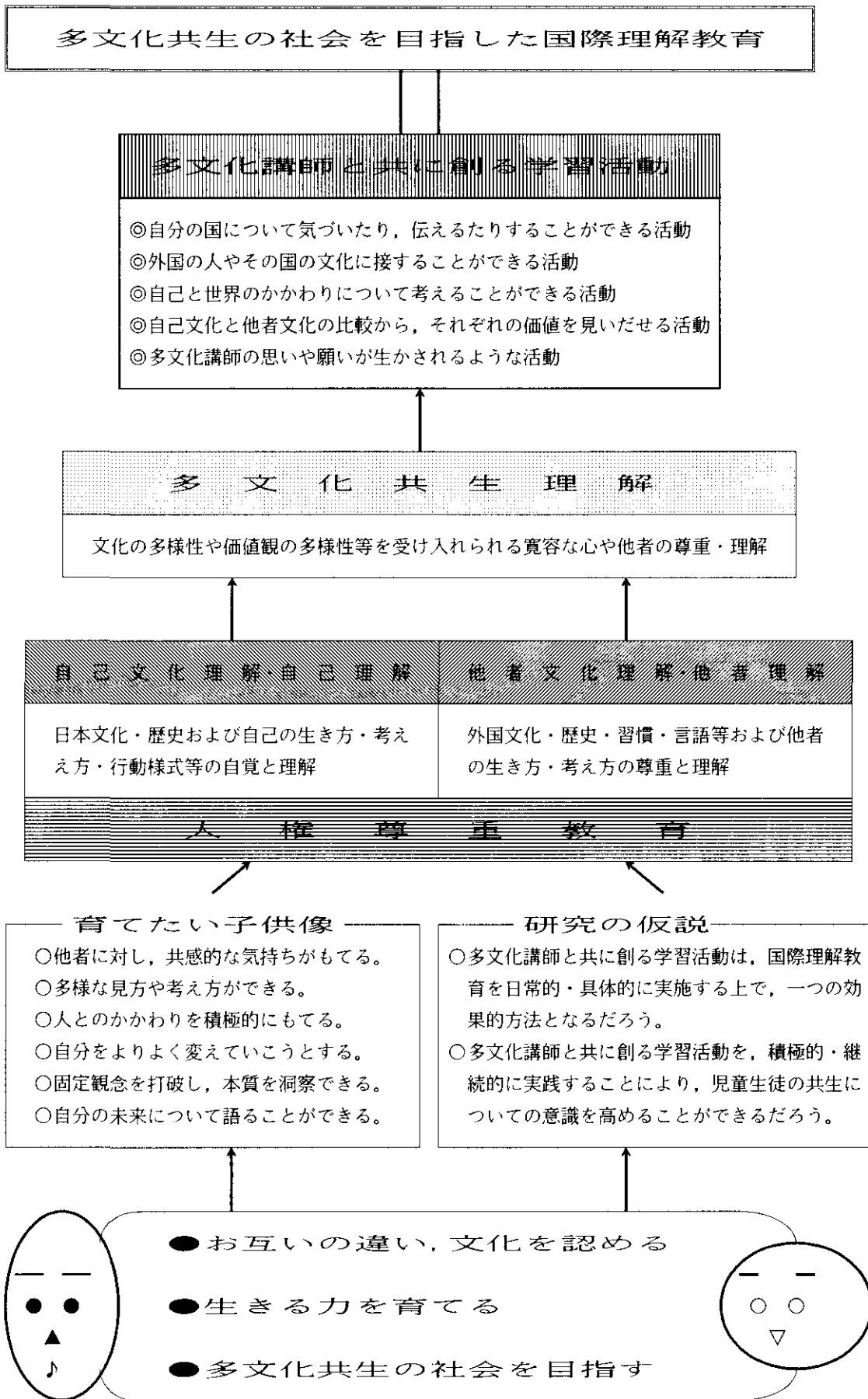
1. 多文化共生理解という視点

私たちは日常生活の中、家庭、学校、あるいは社会などで様々な経験を通して自己の文化を身につけている。そして、この自己の文化は他の異なる文化と絶えず接触しながら、その影響を受けたり、影響を与えたりしながら存在している。

しかしながら、日常では、異文化をあまり意識しないで生活している。そして、自己の文化と異なる文化に接

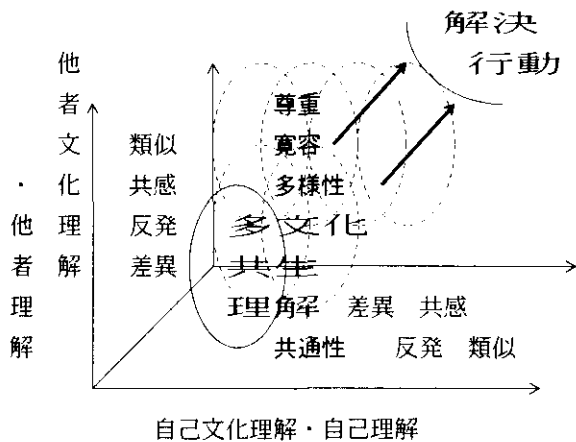
研究の構想

【研究主題】



触した時に異文化を初めて感じる。言い換えれば、接触しない限り、異文化を感じることも見ることもない。国際理解に必要な異文化理解は、違うことを認めることからスタートする。とまどったりすることもあるが、違和感を感じたり、逆に異文化を通して学ぶことは多いはずで、これまでの価値観や世界観が覆されることもある。

国際理解教育の視点として、日本文化・歴史および自己の生き方・考え方・行動様式等について自覚し理解する「自己文化理解・自己理解」と、外国の文化・歴史・習慣言語等および他者の生き方や考え方を尊重・理解していく「他者文化理解・他者理解」がある。



「自己文化理解・自己理解」を一つの平面とし、「他者文化理解・他者理解」をもう一つの平面として考えた時、この二つの面から様々な反射が見られる。共感や反発、類似や差異などである。

一方的な見方だけをしていたのでは、異文化の違いのみに気づくだけであり、ただの発見で終わってしまう。

双方向的な見方をすることにより、双方の違いに気づき、共通性や多様性等を受け入れられる寛容な心と他者を認め、尊重する態度が育ってくる。これを「多文化共生理解」と捉え、多文化共生を目指した国際理解教育の主要な視点として考えていくことにする。

2. 多文化講師と共に創る学習活動

— 3つの視点 —

多文化講師との直接体験を通して異文化に対するお互いの理解・啓発を目指して、3つの視点から理解を深めていけるような学習活動を考えた。

① 自己理解・自己文化理解

・自分自身、自分の国について気づいたり、伝えたりすることができる活動

② 他者理解・他者文化理解

・外国の人やその国の文化に接することができる活動

③ 多文化共生理解

・自己と世界のかかわりを考えることができる活動

・自己文化と他者文化の比較から、それぞれの価値を見

いだせる活動

・多文化講師自身の思いや願いが生かされるような活動

3. 文化の接触からみた学習段階

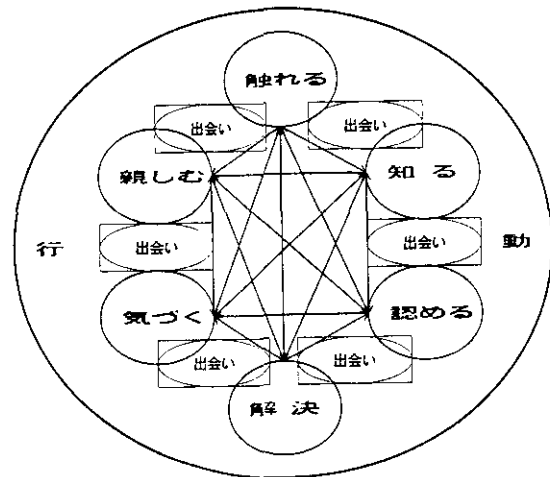
多文化講師との交流を主とした活動の中で、子供たちは異文化についての知識・理解を深め、自らの異文化に対する価値観や思いを意識し、文化的な価値の相対性に気づいていく。その結果、次のような文化の学習段階を経て学習が深まり、定着していくものと考えられる。

- | | |
|-----|---------------------------------|
| 段階1 | 異文化と「出会う」(ENCOUNTER) |
| 段階2 | 異文化に「触れる」(CONTACT) |
| 段階3 | 異文化に「親しむ」(ENJOY) |
| 段階4 | 文化の相対性、価値観の多様性を「知る」「気づく」(AWARE) |
| 段階5 | 異文化を「認める」(ACCEPT) |
| 段階6 | 問題意識をもち「解決する」(SETTLE) |
| 段階7 | 異文化を認知した上で「行動する」(BEHAVE) |

しかし、文化の学習段階は必ずしも段階の1から順を追って深まっていくものとは限らない。文化を嫌い、受け入れることもできない「反発する」段階(REJECT)や、「否定する」段階(DENY)も見られるのではないかな。

目標段階としては段階7を最終目標とするが、異文化と「出会った」後は、各個人個人によって文化の受けとめ方も違い、その深まりは異なるものであると考える。

図で表すと次のようになる。



4. 実践と考察

【授業実践例1】(検証授業2)

- 授業学年 小学校1年(道徳・国語合科)
- 授業内容
 - ・ベンガル語によるあいさつ
 - 「コミュニケーション活動」
 - ・民族衣装の紹介「他者文化理解」
- 視点 他者理解・他者文化理解
- 段階 「触れる」「親しむ」

□文化講師 シャミマ・ラフマン (バングラディシュ)

□授業について

入学した時から、新しい仲間づくりの基礎として明るくあいさつするよう呼びかけてきた。ここでは、外国のあいさつを知ることを通して、あいさつは「心と心をつなぐ大切なもの」で国が違っていてもあるのだ、ということを感じとらせたかった。また、外国の人と身近に接することにより、外国との心理的な距離を縮めたいと考えた。

さらに、あいさつの他にも民族衣装や香辛料などを使いながら、国のいろいろな物の紹介もしてもらいたいと考えた。

□授業計画

第1次	あいさつについて話し合う	1時間
第2次	多文化講師とその国の紹介	1時間
第3次	多文化講師との交流	1時間
第4次	お礼の手紙を書く	1時間

□第3次の流れ

学習活動	教師の支援	資料
1. 多文化講師の紹介	○名前、国、位置、国旗などを思い出させる	名前カード 国旗 世界地図
2. バングラディシュの言葉で挨拶の学習 おはようございます こんにちは ありがとう	○子供とともに話を聞く ○ベンガル語で多文化講師と挨拶させてみる ○国によっては「おはよう」「こんにちは」の区別がないことを知る	挨拶カード
3. 民族衣装サリーの紹介	○長い布であり、実際に着て見せる	サリー
4. バングラディシュの物の紹介	○多文化講師と子供たちの交流を大切に	スパイス 写真
5. 質疑応答	○子供の反応によっては学習4とつなげる	
6. 記念撮影	○にっこり笑ってポーズをとる	カメラ
7. 多文化講師に歌のプレゼントとお礼	○教えてもらったベンガル語で「ありがとう」と言う	

考察1—直接体験から得られる理解

本学習前に、子供たちにどの程度の情報を与えていくかが議論された。大方の意見は、「世界地図を見せてバングラディシュの位置を確認する」とか「人口はどのくらいか」「国旗は...」というものであった。私たちが思いつく学習というものは、いつもこのような一般的な知識であるが、果たしてこれは他者を理解する上で本当に必要なことなのだろうか。地図の上でバングラディシュを指し示し、「赤道に近いから暑い」などと教えても大した意味はないかも知れない。その点、子供たちがこの交流学習から得たものは、彼女から得られたまさに「事実」であって、他者理解の上で重要な情報となるに

違いない。一般化されていないからといって価値のないものとは言えないだろう。

考察2—一人との触れ合いを中心に考えた授業展開

「先生、シャミマンさんと遊べなかったからがっかりした。いろいろな物見せてもらったからよかったです。」

今回の授業では、『触れる』『親しむ』段階を主に考えた展開であったが、小学校低学年では、民族文化を伝えることより、人との触れ合いを中心に考えた授業展開の方がよかったのではないかと考えた。

また、子供たちの「一緒に遊びたい」という気持ちを優先させることを考えた方がよかったかとも思われた。

教師側がよかれと考えた流れは、子供たちの願っていることと一致しないことがある。

考察3—授業の有効性

(1) 感受性の高まりが見られた

授業後、黒板に書かれたベンガル文字を、「消さないで！」と言う子供たちの声を尊重して、翌週の月曜・火曜日までそのままにして授業をした。水曜日にベンガル語で「ありがとう」「さようなら」と言いながら黒板の文字を消した。また、「帰りの挨拶をベンガル語で言おう」という子がいたので、みんなで言った。幼いうちに多様な文化に触れ、異質なものに対する感受性の幅を広げておくことは、後年の異質なものへの感受性を高めることにつながるのではないかと考えた。

(2) 「興味こそ学習の動機づけ」

最近、特に子供たちの学習に対する興味の減退が問題になっている。毎日毎日、同じようなことの繰り返しの飽きてしまった子供の姿が見られる。

本学習では、肌の色も言葉も違う婦人と話し合ったり一緒に勉強したりする新鮮さを子供たちは感じとった。



子供たちの感想から考察する。

せんせいあのね。しゃみまんさんがきたらすごいことばをおしえてくれました。たぶん にほんのひとは いえないとおもうよ。また あってみたいな。

せんせいあのね。きんようびにしゃみさんがきたよ。とてもたのしかったよ。くさいものをみせてもらった。またきてくださいといっってください。

おかあさんあのね。きんようびにしゃみさんにべんがるごをおしえてもらいました。「あっさらあむあらいくむ」「どんのばー」あとしゃりーというふくをきてきてくれました。あといいにおいも。

これらの感想からわかるように、いろいろなことを聞いたり、「して欲しい」と頼んだり「受け身ではない」積極的な学習を体験した。小学校低学年の子供たちにとっては、見知らぬ文化社会から来た人との『出会い』の中で私たちが想像していた以上のインパクトがあった。

F子さんは、本授業のあと、図工の時間に作った動物にシャリーを着せていた。

また、長野オリンピック開催時には、「入場行進にバンガラディシュは参加するのか」と、尋ねてくる子供もいた。異なる文化と直接的に触れ合ったことが子供たちの心に強い影響を与えるものだと思う。

課題として

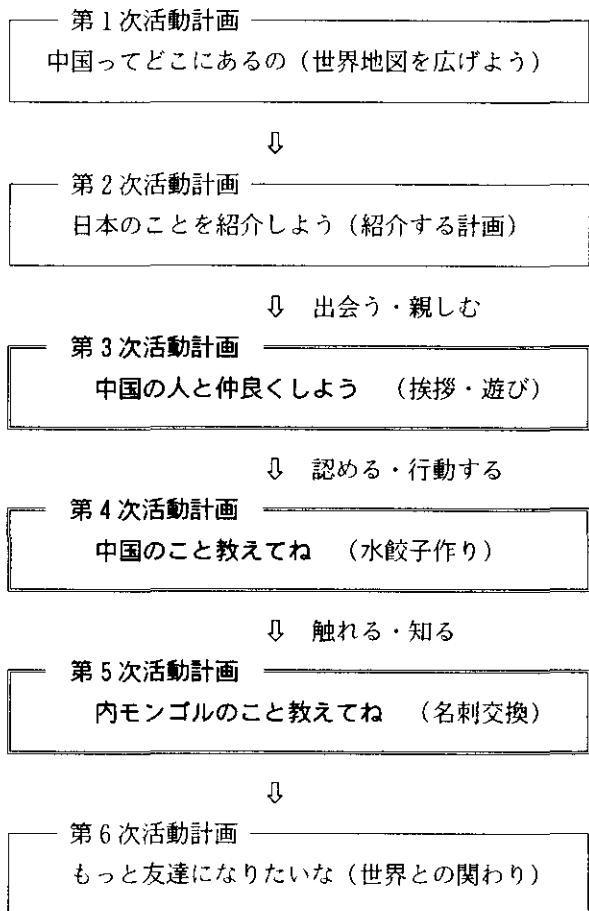
子供たちは、多文化講師との学習を通して自分たちの知らない国の人々の文化と考え方の一端を知ることができた。授業後、教室や廊下に掲示してある世界地図を自然に見るようになり、日本とバンガラディシュの位置をもとに他の外国を見るようになった。

その人達を理解し、受け入れていこうという気持ちにつなげていくことが次のステップだと考える。

【授業実践例2】（検証授業5）

- 授業学年 小学校3年
- 単元名 「世界はともだち」（総合的な学習）
- 文化講師 ホビスハマト、オランモレン（モンゴル人夫婦・在日3年）
- 視点 自己理解、他者理解、多文化共生理解
- 段階 「親しむ・知る・認める・行動する」
- 単元目標
 - ☆外国の人やその国の文化に接することで、多様な見方や考え方を受け入れる豊かな感受性、相手を尊重する態度を育てる。
 - ☆自己文化や異文化に関心をもち、その文化間にある共通性や多様性に気づかせる
- 授業計画と単元について
 - 小学校では、学年が低くなるほど異質なものに接した時の違和感、抵抗はあまり感じられないようである。む

しろ、興味や関心の対象としてとらえようとする傾向がある。こうした異文化へのプラスと思える特徴を生かしながら、多文化講師との交流を中心とした学習活動を通して、さらに異文化への認識、多様なものの見方・考え方をより一層受容できる態度を育てたいと考えた。



今回、クラスの子供たちが興味を抱いた国は「中国」であった。音楽の時間に「茶摘み」を歌った際、新茶の話からウーロン茶の話に自然と移っていった。その時、子供たちから「中国」という国名が出てきた。そこで、これをきっかけとして多文化講師として中国の方を呼ぶことになった。いわゆるステレオタイプとしての中国ではなく、講師との『出会い』から民族の文化とそこに生きる人を知ってもらいたいという授業を進めていく計画をたてた。

単元名にある「世界」とは世界の国々一つ一つを指すのではなく、多文化講師という小さな窓の向こうに広がる異文化の世界を意味している。多文化講師との触れ合いを通して、窓の外に広がる世界を身近なものとして受けとめ、考えさせたい。また異文化に対しての自己文化にも興味をもたせ、異文化間にある共通性に対しても自然な形で感じ取らせたいと考え、この単元を構成した。

多文化講師との授業は、6月から7月にかけて4時間

実施した。それ以前の学級の子供たちは、異文化に直接する機会はほとんどなく、また、自己の文化についての認識も低かった。友達同士の関わりについても、自分だけの世界に閉じこもるなど、外との関わりに対して消極的な子供もいた。自分たちだけの日常生活とは異なる世界をもつ多文化講師との『出会う』『触れる』体験活動を重ねる中で、そうした子供たちの意識が少しずつであるが変化してきた。

「世界はともだち」の活動は、学校裁量の時間を使って計画し、子供たちの取り組み方や思い、願いを多く取り入れていくという方向でスタートした。

□単元の流れ

[第3次]

学習活動	多文化講師の活動	担任支援
中国の人と仲良くなろう		
講師紹介	初めに中国語で話をして、続いて日本語で自己紹介する	拍手で迎える
挨拶練習	中国語の挨拶を教える	内容を考えさせる
歌や遊びの紹介	ハンカチ落としのような遊びとその歌を紹介、一緒に遊ぶ	楽しく遊ばせる
一緒に遊ぶ	子供たちの中に入って一緒に遊ぶ	日本の歌や遊びを紹介する
感想発表	日本の子供たちと触れ合った感想を述べる	感想を発表させる

「中国の人と仲良くなろう」というテーマで、遊びを通して触れ合い、親しんだ。国や言語・習慣・文化の違いがあっても、子供たちは似たような遊びを通して楽しさを共有していたようだ。もっと触れ合い、もっと知りたいという興味や関心が感じられた。

給食を一緒にとり、昼休みに子供たちは学校案内をする等の活動を通して、多文化講師との触れ合いを深めた。



[第4次]

1時間目は「中国ってどんな国」というテーマで話をしていくうちに、中国一般の話題から2人の出身地である内モンゴルのことに話は変わっていった。

学習活動	多文化講師の活動	担任支援
中国ってどんな国		
挨拶の復習	挨拶をもう一度教える	中国語で挨拶・紹介の表現を教えてもらう
表現練習	自己紹介の表現を教える	
中国についての話を聞く	実際の中国は、どんな国なのかを話す ・中国の位置や国旗 ・出身地のこと ・生活の様子 ・学校生活 等々	事前にまとめた子供たちのイメージを伝える
質問応答	質問に答える	中国について質問させる

2時間目は、「水ぎょうぎをつくってみよう」というテーマでモンゴルの水ぎょうぎづくりをした。食文化に触れながら、その背景にある様々な文化や考え方に気づかせたいと考え、『認める』段階の授業を進めた。

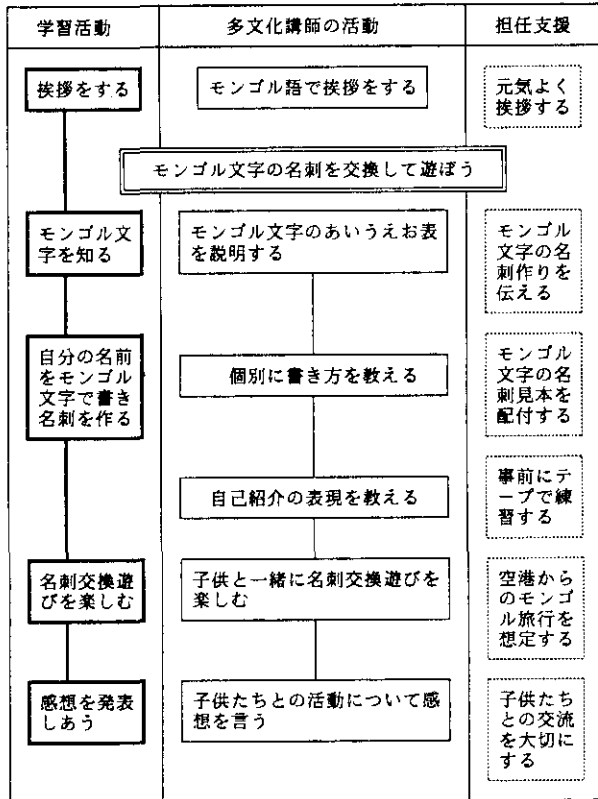
授業は、ホビスハラトさんによる水餃子の材料の紹介から始まった。子供たちは自分の家の餃子や校長先生が教えてくれた餃子の材料との違いに気づき、作り方の違

学習活動	多文化講師の活動	担任支援
水餃子を作ってみよう		
水餃子の材料の比較	ホビスハラトさんの水餃子の材料を紹介する	家の餃子の材料を紹介する
作り方紹介	水餃子の作り方の説明 ・餃子の中身 ・餃子の皮の作り方 ・具の包み方 等々	作り方を紹介してもらう
	水餃子の材料を配る	説明を聞かせる
	各グループを回り一緒に作る	作り方や茹で方の注意を確認する
水餃子作り ・具を作る ・皮を作る ・具を包む ・茹でる		
食べる	子供たちと一緒に食べる	お茶やモンゴル茶と共にいただく
	モンゴル茶を用意する	
感想発表	一緒に作った感想を述べる	感想を発表させ、後片付けをする
後片付け	全員で片づける	

いを知って驚いていた。調理の場面では、見よう見まねで餃子の皮をのぼしたり、具を包んだり、匂いを嗅いだり様々な体験をした。茹で上がった水餃子をモンゴル茶とともにいただき、子供たちも大変満足していた。

〔第5次〕

講師の2人も徐々に授業に慣れ、子供たちから何の違和感もなく受け入れられるようになってきた。本時は「内モンゴルのこと教えてね」というテーマでモンゴル文字についての学習と、モンゴル文字を使っての名刺交換遊びをした。



最初に、黒板に張られたモンゴル文字表を見ながら、黒板に書かれた3人の名前が誰であるかを子供たちは推測する。次に子供たちが微妙に違うところを見つけ、あれは誰々だと言い当てる。その後、ホビスさんに続いて発音練習をする。事前に講師の2人が子供たち全員の名前をモンゴル文字に直しておいた名刺を、一人一人に手渡した。子供たちはそれを書き写し、友達同士や多文化講師と名刺を交換し合う。モンゴルの言葉に親しみ、子供と多文化講師とが、お互いに心をつなぐことができた。

『触れる』段階から『知る』段階の授業が展開された。
考察1ー継続的な活動の有効性

『継続的』に取り組むことにより、異文化との差が縮められ、子供たちの意識の高揚・変容が見られた。

(1) 多文化講師はもう僕たちの友だち！

「中国の人と友達になりたい？」という教師からの質問に「なりたいたは思わない」という子供たちが5人

た。不思議に思い問いかえすと、「もう友達になっているから」と。多文化講師を継続的に教室に招いたことでいつの間にか、これから友達になるという遠い存在ではなくなり、身近な友達へと変わっていた。

そして、身近な友達となった人からの話はもはや遠い世界の話ではなく、時間的、空間的に自己の世界に直結した、自己と関わる出来事となっていた。

(2) 世界を身近に感じるようになった

子供たちの変容として、まず何と言っても世界が身近になったことがあげられる。話の中に出てきた地名を世界地図で確認しようという子や、給食のメニューを見て「あっ、これ、中国のメニューだ！」と言う子がいた。

子供たちは、これまでの世界の出来事は、自分とはまったく別の世界のことと感じていたが、少しずつ自身自身に近づき、身近な問題としてとらえられてきた。

(3) 文化に優劣はない

子供たちは、理屈抜きにホビスハラトさんとオランモレンさんとの出会いを楽しんでいた。特別に「国」という意識を感じることなく、ごく自然な形で文化に触れ、多様な生き方を理解し尊重することを学んでいったのではない。ここには、日本とモンゴルのどちらの文化が優れているかなどの価値の比較は存在しない。ただ、どの文化や生活にも優れた良い面があるのだ、ということに気づいていく子供の姿を見ることができた。

(4) 個の意識を感じる

今回、水餃子づくりではもう1人モンゴルの方を加えて3人の講師で授業を実施したが、子供たちは彼らを外国人というより、ホビスハラトさんは... オランモレンさんは... と個人として意識し、接していた。

複数で来ていただいた効果ととらえることができる。

(5) 『出会い』から『行動』へ

水餃子作りの後、教えてもらった材料でもう一度餃子を家で作ってみた子供が多くいたことが事後の感想文からわかった。第1次の授業以来、子供たちとの人間関係が深まっていく中、水餃子作りは、子供たちにとって、とても興味深い授業として受け入れられたようである。



水ぎょうぎを家で作ったら、おねえちゃんがたべたよ。おいしいってってくれました。

ぼくは3人に教えてもらった水ぎょうぎを家で作ってみました。かわもつくりました。家のはセロリはいれませんでした、とてもおいしかったです。

中国やモンゴルでおべんきょうしているようなきがしてモンゴルや中国に行ってみたいと思います。

異文化に『出会う』『触れる』段階から、様々な文化があることを『知る』段階へ移っていった。異なる事に出会う喜びや知る喜び、楽しさを肌で感じて、それらが深化していき、『行動する』段階へと進んでいった。

(6) 個々の児童に焦点をあてた考察

① さっそく餃子作りを始めた子供たち

昨日はごちそうさまでした。水餃子はあまり家で作ったことがなかったのでおいしかったです。

朝、新茶を入れていましたら、「モンゴルのお茶を飲んだよ」とのこと。肌色のお茶で... と話してくれ、日本のお茶との違いをいろいろ話しました。今まで飲んだことのない味でカルチャーショックを受けたようでした。(中略)今回はいろいろな意味で子供と話す機会が増え、話がはずみました。子供たちはいいなあ、新しい出会いができて....

K君の母親から、水餃子の授業を終えた後いただいたお便りである。

K君は授業中の発言も少なく、おとなしい児童であるが、学校での様子を母親に話している。モンゴルのお茶が強く印象に残り、それをきっかけとして母子の間にコミュニケーションがうまれている。

② 家庭にまで広がった

ホビスハラトさんとオランモレンさんとの交流は子供たちにとってよい経験、生まれてはじめての体験、外国を知るなど、とても多くのことが勉強できたと思います。昨晩は、A子が水餃子を作ってくれました。小麦粉をボールで練って... 家族全員で美味しくいただきました。(中略)学校での多くの経験は、親の知らない成長を時折見せて、親を驚かせます。準備等いろいろ大変だったと思います。

A子さんを通して、母親までが感化されている。本授業のインパクトが強かったことがわかる。

考察2ー総合的な学習と国際理解教育

教育課程審議会では、国際理解教育を横断的・総合的な学習の例としてあげており、私たちも国際理解教育は総合的な学習に馴染むものと実感した。決して建前を押しつけることなく、またステレオタイプを避けるために様々な方法で取り組むことができる。教科の内容に縛られずに、学習の独自性というものが出せるのではないかと思う。『世界はともだち』というテーマで授業を展開した。教科の枠にとらわれずに、総合的な学習を進める中で子供たちは自然に国際理解教育の目標を達成することができると思う。

考察3ー多文化講師との授業作り

(1) 事前の環境作り

◇子供の意識面での環境

講師やその方の国については、ある程度の子供の予備知識をもって迎えたい。国についての情報は、意識して探すたくさんのものが得られる。クラスの中で特に興味をもって調べた子に朝自習の時間等に発表する場を設けることは、関心を高める上で効果がある。また、招待する手紙などを送るのは、コミュニケーションの第一歩として役に立つのではないか。

◇教室環境

教室環境も雰囲気盛り上げるためには大切である。できれば、それが教師が用意したものではなく、子供たちの意識の高まりの中から生まれたものであると、さらによい。多文化講師の国に関係あるもので、本、カレンダーの写真、旅行社のパンフレット、人形や民族衣装等の掲示、民族音楽を聞くのもよい。



(2) 授業の計画と留意点

国際理解的な視野を含んでいる教材は、勿論使いたい、それだけではなく子供たちの課題も大切にしていきたい。そのために、日常の学校生活の中から自然と生まれてきた疑問や意識の高まりをキャッチしていき、それをきっかけとして授業計画をたてるとよい。

子供たちの願いや思いに沿った学習活動を考えることが大切である。

(3) 打合せの際の留意点

講師との打合せは十分にとることが大切である。実際に会ってお互いに自己紹介し、ある程度の信頼関係を作ってから授業内容の検討に入っていく。この時、個人的な紹介だけでなく、子供たちのことや簡単な学校紹介もできることが理想的で、講師も安心して授業に望む心がまえをもつことができる。

打合せでは、まず授業の意図を伝える。教師がしっかりした授業のプランをもつことが大切で、たとえ打合せの結果、授業内容が変わることがあったとしても初めに授業のプランなくしてはスタートしない。また、具体的な話し合いでは、互いに何ができて、何ができないかをはっきりさせなければいけない。言葉の問題もあるので、曖昧な形ではなく、しっかり伝えることが大切である。授業について困っていることや悩んでいることがあったら一緒に考えればよいだろう。

【授業実践例3】(検証授業6)

□授業学年 中学校3年

□単元名 「民族の生き方に学ぼう」(総合的な学習)

□文化講師 玉吉順(韓国女性・在日13年)

□視点 多文化共生理解

□段階 「知る」「解決する」

□単元目標

☆多文化講師の経験談や新聞記事から、国内にある偏見や差別意識について考える。

☆民族の文化と生き方に共感し、共生しようとする気持ちをもたせる。

□単元について

今日、異なる民族間あるいは文化間の共存・共生をどのように進めていくかという課題は、国際化が進展していく中、極めて重要である。

日韓の相互理解や協力関係は育っているが、まだまだ「近くて遠い国」といったイメージの韓国である。3年生英語科のテキストには韓国を扱った単元があるが、内容は位置が対馬からわずか50キロの所にあること、言語はハングル文字を使用していること、食事の際は茶碗を口元へ持っていくことは不作法とされていること、という程度のもので韓国理解には甚だ内容不足である。生徒たちの韓国・朝鮮への認識にしてもキムチやチマチョゴリ、サッカー、ワールドカップといったものが多い。

また、折しも北朝鮮のミサイル発射事件のこともあって、「テポドン」「怖い」といった印象を述べるなど韓国と北朝鮮を混同していた生徒もいた。いずれにしても生徒の関心は高くはなく、もっと理解を深めようという

願いが教師にあった。生徒たちからも可能ならば、韓国の人から直接、言葉や文化について学びたいという希望が聞かれた。こうした中で多文化講師の招請となった。

両国民の間には様々な摩擦が生じており、排外・差別という仕組みと意識を払拭していく試みが必要である。

今回は、韓国理解を深めるとともに、日本社会にある差別意識について考えるきっかけづくりを第一と考え、その授業づくりとなった。

□授業計画(英語科授業の中で実施)

第1次	韓国の文化について調べよう (調べ学習)	1時間
第2次	アンニョンハセヨ! ・ハングル文字に親しむ	1時間
第3次	民族の生き方に学ぼう ・多文化講師を招いての学習① ・意見、感想交流②	3時間

□授業の展開

多文化講師との授業は継続して2時間行った。

第2次ではハングルの由来や言語形式について、日本語との類似点や相違点を『知る』学習をした。

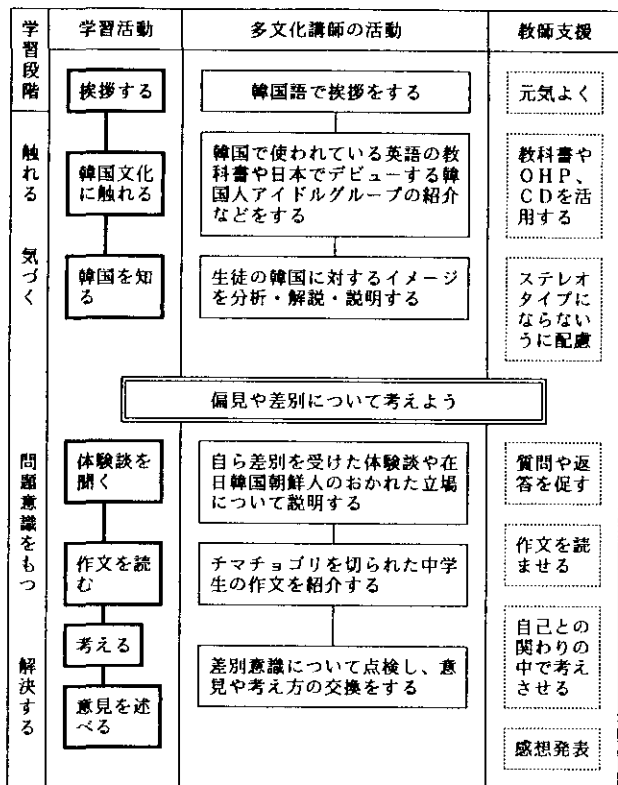


第3次では偏見・差別問題を扱うために問題が重くなることが予想されるので、多文化講師の玉さんとの心理的な距離を少しでも縮めておこう、という気持ちで授業を進めた。終始、笑顔で授業をされた玉さんのソフトな雰囲気生徒たちも、「すごく明るい方で、いきなり話しかけられても大丈夫でした」と語るなど、生徒たちとの親近感を感じることができた授業展開であった。

授業では、生徒が抱えている韓国に対するイメージについて玉さんから解説を加え、説明をしてもらった。我々の持っている韓国理解があまりにも画一的であることに残念がっていた。

引き続き、国内での差別体験やチマチョゴリを切ら

れた中学生の話などを聞いて生徒に考えさせる展開を試みた。問題がやや複雑な点もあり、授業内での生徒たちの反応は静かではあったが、一人一人考えるところがあったように思われる。



考察1ー共に考える時間がもてた

本授業は、自己と世界との関わりについて考える活動を中心に、在日韓国・朝鮮人に対する差別や偏見について直接話を聞き、共に考える授業展開を考えた。多文化講師の玉さんは、いわゆる『在日』韓国人ではなかったが自ら経験された差別体験を話し、在日韓国・朝鮮人の置かれた立場と苦悩について代弁してくれた。生徒も熱心に聞き入り、彼らにはかなりの説得力をもって受け入れられたようだ。授業終了後「在日の方を呼べば、本当の在日韓国・朝鮮人の苦しみが聞けるはずですよ」と、玉さんは語っていたが、今回の授業では、たとえ在日でなくとも十分な知識と生徒たちを説得する力量のある方だったので特に問題はなかったと思われる。

考察2ー受け入れやすい学習段階

異文化理解と人権尊重を教科の枠を越えた総合的な学習の中で創っていく授業を考えたが、全体としては、もっと子供たちにとって受け入れやすい段階から学習活動を設定をしていくことを考えた方がよかった。

文化の異質性と普遍性を理解する学習の前段階として、ハンゲルや韓国の食文化、音楽などを『親しむ』『知る』という受け入れやすいところから多文化共生的な理解に移行していくような計画を考えたい。

考察3ー感想交流から考える

(1) ステレオタイプの打破

意味を知っていたにせよ、知らなかったにせよ、『パカヨンカメラ』という言い方を安易に使っていたことを多くの生徒が反省していた。望ましくない偏見やステレオタイプ的な見方は、家庭や地域社会における幼少期の体験を通して形成されるところが大きい。ステレオタイプ化されたものに気づかせる学習が必要である。

多文化講師との出会いによりステレオタイプ化したイメージを崩すことが可能となった。

(2) 「差別はあって当たり前」か

誰だって差別や偏見の気持ちは心の中にもっている。自分と違う人を嫌い、自分と似ている人を好きになる。それは、いけないことだと思うけど...
差別や偏見はうまれて当たり前のものだと思う。

頭では「差別はいけない」と思っている、差別らしき態度をとったり、近寄らなかつたりしている人はたくさんいると主張するK子さんの意見で、彼女の意見はさらに続く。

あの人はなんか違うというのはある。小さいことでも、それが差別・偏見に繋がるといけるのでは。
だから、どんなに小さくても私たちの中には、そう感じる気持ちはあるので、これからなくしていくのは難しい問題だ。

差別を否定している一方、心の中で差別も仕方ないと考えている二面性が見える。自分は差別をしていることに気づいているにもかかわらず、差別を排除した行動がとれない歯がゆさを感じているようだ。

また、自分と異なる考えや行動を受け入れることを難しく感じている。差別はあって仕方がないという考え方をどう変えていくかが今後の課題となるだろう。

(3) 共感的な理解が読み取れる

一人の人間に対して、もっとあたたかい目で見たい。心を開いてあげれば差別はなくなる。
同じ人間で偶然、国が違っているだけなんだから人種が違うとか、そういうことにこだわって差別する人は恥ずかしいと思う。「もっと、心を広くもとう」友達どうしにしたって、性格などの違いを認めあっていくことが必要だと思う。

差別する人を恥ずかしいと思っている意見である。「心を開いてあげれば...」「もっと心を広くもとう」という姿勢は『共生』の出発点である。

私も消極的な方ですが、勇気を出してクラス内でいじめられている人と交流をもった時、周りの人が自分を通じてその人を理解してくれるようになりました。差別意識を取り除くのは難しいが、自分の小さな行動だけでも抑えることができるはずで

自分には関係がないというのがよくないとU子さん。
考察4－反発からの話し合い

授業終了後、Tさんは次のような感想を聞かせてくれた。この感想をもとに、生徒の本音が出始めた。

国籍も性別も顔も、確かに自分で決めたことじゃないです。けど、それは、まぎれもない事実なんです！理想と現実と一緒にしているように聞こえて、私としては意見が合わないなと思いました。でも、先生調で言えば『違う』からいいんですね？いい悪いじゃありませんね。先生も結構、日本人に対して言うことキツイですよ。女の子にツバをはいた人や警官が日本人の全ての反応じゃないんだよね。先生もわかってらっしゃるでしょうけど、そう聞こえました。国として、政治としての問題や事情と国民や個人の感情は大切にすべき点が違うのですから。それで在日韓国・朝鮮人の方々がひどい目にあっているのはまぎれもない事実だと思います。けど！日本にいるからにはその状態に何とか耐えなくちゃいけないはずで。従って言っているんじゃないかと。被害妄想的な部分も少なからずあるんじゃないかと。もちろん、差別する日本人というかその人達も悪いですけど。んーだから、韓国人とか日本人って分けてこういう話すすめちゃだめです。（中略）先生とは考え方の波長と人間的に合わないようです。日本人と韓国人としてではなく、私と先生として。

●Tさんの意見に同感という生徒からの意見である。次のものは、かなり強烈に述べられたものである。

確かに唾をはいたのは日本人の誰かであるけど、日本人としてまとめて言われちゃあたまないね。

すべてをわかったような言い方というのがあったけれども、話を聞いていて僕もずっとそう思っていた。感想文は多分、玉さんも読むと思ったから書かなかったけれど考え方が違うのにみんな別々なことが素晴らしいとか、そういった事は違うと思った。

感想文を書かせると講師の方が読むのではないかと、本音を書かない生徒が多くいるのは事実である。

●はっきり嫌悪感を表す生徒もいた。

おれたちを説教しているようでむかついてきた。

あの時間は、確かにこれはいけないと考えさせられたけど、実は納得できない点もありました。

●考えを明確に述べたTさんを尊敬した意見もある。

私は、あの女の先生の話聞いて、すごく納得して感動してました。でも、Tさんの意見を聞き、自分の意見をすごくはっきりもってて、その場の状況に流されないっていうか... 彼女の意見に全部同感するわけじゃないけど、自分の考えをはっきりと言えるところを尊敬します。



●一方、Tさんの意見に反論する生徒も出てきた。

日本にいるからには少しは酷いことをされるのは承知しなければならない、耐えなければならない、という意見があったけど、私はそれは違うと思う。

その人は在日韓国・朝鮮の人を一人の人間としてではなく国境というものを境にして自分と区別していると思う。自分が学校でつばをはかれたら誰だって悲しいでしょう。それは日本人もアメリカ人も韓国人も朝鮮人も同じ。被害妄想でもなんでもなく、つばをはいた人が悪い。国籍がちがくても仲良くすることはできると思う。（中略）私は、何とか人じゃなくて一人の人間としていろんな人と仲良くしたい。私は「仲良くすべきだ！」とみんなが思うんじゃないかと「仲良くしたい！」とみんなが思えば最高に良いと思う。



国境との区分でもなければ、一人の人間としての区分でもなく、意見交流していく中で一人の人間としていろいろな人と仲良くしたいという結論に達したのだろうか。
●Tさんは少し勘違いをしているのではないかと、という生徒もいた。

先生は、私にとってそんな風に言ってるようには見えません。少しでもそういう風に聞こえた面があったのでしょうか。人、一人一人の考えは違っていいのですが、ちょっとそういう考えの人がいると思うと悲しいです。とても複雑な感じがします。

話し合い終了後、Tさんには考え方を变えるような指導はしていない。考えを尊重した上で、他の人の意見にも耳を傾けて欲しいと話した。

●他の人の意見を聞いた後のTさんの反応

勘違いされたという人がいたようで、ちょっとがっかりしました。私も「一人の人間として」って言ってるんですが...あの先生が「日本の男性」とか「日本の警察」って言い方をしたことに反論しただけです。「在日韓国人はそういう目に合ってます」みたいなこと言うから。あの先生こそ国境云々と言ってたと思うのですが、未だにブンブンです。

「仲良くしたい」って皆が思えばいいっていうのは理想であって、「仲良くすべき」っていうのは事実です。事実を淡々と述べた喋り方すると嫌われるんですよねー。私、優しくない人なので。あっ「同感！」っていう人がいて嬉しいです。前の時間「冷たいのは私だけ？」と切なくなっていたので。

Tさんの考えをもとに様々な意見が聞かれた。友達がいろいろな考えをもっていることを知って、そのことに感動していた生徒が数多くいた。

●もういい加減、話し合いはやめて欲しいという声も出てきた。

みんな違うというのは素晴らしいことでもなんでもなく当たり前のことなんです。つまり、みんな違うのだから、一つの意見に対してこんなに話し合う必要はないんです。正しいか間違っているかなんて決められるはずはないんですから。

私はもう別にどうでもいいっぽくなっている。差別なんて結局は、なくなるから。

●これを打ち消すような意見が出た。

彼女の意見は間違っていないと思う。それに、私たちはそういう風に差別されたりとかの経験があまりないから、こんなに勝手なことを言えるのであって、彼女はそういう経験を直接的にも間接的にもしているから、うちのらにとってつけたような意見よりは、ずっと説得力があると思う。

この発言で、差別はなくなるものではないと言っていた生徒も黙ってしまい、意見交流を終えることにした。

考察5ーきっかけができた

在日韓国・朝鮮人問題は、今日の日本において重要なしかし非常に難しいテーマである。生徒たちにとっては玉さんとの出会いはとても衝撃的な意味を持つものであったようだ。

どれだけ自分たちの問題として認識できたかが、また認識できるように（多文化講師・担任教師が）もっているかがポイントであろう。

違いを違いとして尊重する気持ちと、自己変革をしていく態度がもてるといい。

本テーマについては、今後も時間をかけて取り組んでいく必要を感じている。

課題として

差別の撤廃は口でいくら言っても難しいものがある。上っ面で終わる危険が心配である。幼い頃から、家庭で地域で、学校で、指導や対応の仕方を考えなければならぬ。

玉さんから生徒へのメッセージを受け取った。「明日のことだけを考えず、同じ地球に住んでいる者として考えて欲しい。無駄と思えることにも頭を使って欲しい」

これは、多文化共生を子供たちに進めていく上で大きな意味を持つ言葉である。なぜなら、国際理解教育は、自己と他者の人権を尊重しながら、異なる文化を認め世界の人々と共に生きていく教育だからである。

●その後、玉さんに生徒との意見交流についての話をしたところ、次のような手紙をファックスでいただいた。

(原文のまま、前略)

どの辺に座っていたのか、どんな表情をしていた方なのか思い出せなくて残念ですが、

私は、その日みなさんと出会えたことがなによりうれしく楽しかったので、一人一人がきらきらひかかって見えたように覚えています。

だれでも、経験したことのない事柄や自分と違うことに出会ったとき、戸惑いや拒否反応を起こすことは大いにありうることです。

私にも、そんな体験が数多くあります。そんなとき私は、いつも相手と立場を置き換えて見ることにしています。すると、いままで気づけなかったことや、その人の思いが見えてきます。時間をかけていいと思います。自分の気持ちも大事にしながら、戸惑いをのりこえ理解できる時がきっと来ます。

Tさんは、どんなことから『在日韓国・朝鮮人の方々が、ひどい目にあっているのは紛れもない事実だ』と、わかったのでしょうか。

貴女が、その方々のように自分の意思と関係なく、この日本に生まれ、日々ひどい目にあって暮らすことになったとしたらどうでしょうか。なんとか耐えなくちゃいけないのでしょうか。紛れもない事実だとしたら、決して被害妄想的なことだと言っはけないはずです。

私は、理想と言うのは高くかかげておくものとは思いません。日々、現実を理想に近づける労力が必要だと思うし、そう生きていきたいと思います。

たった2時間の一方的にメッセージを伝える授業では、個々をよく知ることはできないと思います。人間的に合わないと言われても仕方のないことですが、私は貴女とぜひ、また会いたいと思います。するどい感性の持ち主だと感じますし、貴女の気持ちをもっと聞かせてもらいたと思います。(中略)

人はだれでもあやまちを犯します。でも、そのあやまちに気づいたとき、そして改めたとき、だれからも受け入れられると思います。

これから、貴女にもよろこびの体験、気の休まる、あったかい出会いがあることと思います。どうか、すぐに結論を出そうと急がないでください。ゆっくりでいいのです。受入れられたときのよろこびを他人にも分けあえたらいいですね。

庭の柿の木に柿がたわわに実り、子供の頃の故郷の秋を思い出させてくれます。気温差の...(後略)

Ⅲ 研究の成果と課題

多文化講師との学習活動(交流)は、ささやかながらも共生と異文化交流の一場面を教室に設定することで、成果をあげることができた。

異なる文化をもつ人々との触れ合いや感動体験を通して『共生』への意識が高められたのではないだろうか。

1. 研究の成果

(1) 人とテーマの継続性と深化

多文化講師と共に継続的に授業を実践した結果、ある程度の成果が見られた。

検証授業6にもあるように、反論したり、反論されたりする中で子供たちだけでなく、多文化講師自身の日本や日本人に対する理解も深まり変化もしていった。

共に創る学習活動を通して、多文化講師の日本理解に影響を与え、このことから相互的な成長や発展というものがあったものと思える。

○授業を共に創った多文化講師の実感

- ・子供たちの触れ合いを通して何かが変わるかも知れないという期待感を感じた。

- ・自己の存在が感じ取れた。

- ・マイノリティとして堂々と表現できる場であった。

○教師側の意識の変化

- ・外国に近い存在に感じられた。

- ・外の世界への広がりを感じた。

- ・ともすれば欧米諸国に向きがちな目がアジア諸国に向けた。

- ・日本人としての生き方についてあらためて考えるきっかけとなった。

- ・国際協力や国際政治のあり方などを考え直した。

(2) 国際理解をめぐる学習プロセスの重視

授業実践は、講師依頼から始まり、事前の打合せを経て、授業がスタートした。多文化講師と子供たちとの出会いから学習は深化していった。積極的かつ継続的に実施することで子供たちは平常の授業では味わうことができない喜びや感動、新しい発見をすることができた。

国際理解教育は、ややもすると「きれいごと」で終始しがちである。検証6では「きれいごと」に終わらせるのではなく『葛藤』を通して考えさせる試みをしたが、結果として、これは子供たちにとって成長の一つの契機になったのではないか。

子供たちの『葛藤』に目を向け、それをどのように解決していくか、どのように成長のプロセスに転換していくか、一つの方向性を見ることができた。

(3) 多文化講師との授業の有効性

7つの検証授業を振り返り、多文化講師と共に創る学習活動の成果を次のようにまとめてみた。

- ・交流は実際に子供たちが主体となって行動しなければならず、知識だけの学習ではなかった。
- ・交流は共に考える機会・場を生み、また未知の部分もあって、子供たちの興味・関心を引きつけた。
- ・交流、コミュニケーションのあり方に対する理解が実際の交流授業を繰り返す中で深まっていた。
- ・交流により、国を知り、生活や文化に対して新しい認識がもてた。
- ・抽象的な国際関係ではなく、他の国や文化と自分との関わりについて具体的に考えることができた。
- ・実体験を通して、国やそこに住む人が違えば異なった考えをもっているのだ、という生きた国際感覚を養うことができた。

2. 今後の課題

(1) 総合的な学習の取り組み

これからの国際理解教育は、総合的な学習や課題解決学習などを視野に入れた、子供たちの思いや願いをもっと大切にしたところに切り口をもって実践を進めていくことが必要となってこよう。

子供たちの自由な発想に任せた形の交流授業の中で、子供たちがどう変容していくのか、どう変容していけばよいか、さらに探っていきたい。

(2) カリキュラムの編成

多文化講師との授業は、従来の教養主義的な理解中心の異文化理解学習と異なる創造的な学習活動である。

それぞれの多文化講師の能力が活かされ、国際理解教育の視点からの学習内容が効率よく学べるカリキュラム編成が必要となるだろう。

(3) 評価

評価のプロセスについては、多角化していくことも必要である。アンケート形式ばかりではなく、感想文等の分析や観察調査等の分析、教師のインタビュー、また、外部の意見も取り入れながら、その結果を現場にフィードバックしていく。そして、その中から出てきた課題をさらにフィードバックしていくという多角化した評価、継続的な評価と実践等が今後の方向性として考えられそうである。

(4) 地域の教育力を活かした中での研究

本研究の授業実践は、外国の方との授業を主として行ったが、これからは地域に在住する方を日本人・外国人と区別することなく招き、共に学習活動を創っていく中での研究を進めていくことが必要となってこよう。

おわりに

これまでの国際理解教育は、「理解する」「理解させる」ことに重点を置きすぎていたかも知れない。

他者を理解する、他者の文化を理解するなど本当にで

きることなのだろうか。

文化や考え方の違いに「気づく」ことができる児童生徒の育成を基本にして、「理解できない」という前提で進めていくことも必要であると思う。

「あ、ちがうな」ということに気づいたり、「おかしいぞ」「どうも、あわないな」という感覚も大切にながら、自分の中にある偏見や誤解を少しでも是正していくことができればよいのではないかと。指導者として、そういう国際理解教育マインドをもっておきたい。

最後になりましたが、本研究を進めるにあたり、適切なご指導・ご助言をいただきました先生方、研究をご支援して下さった研修員所属校の校長先生並びに教職員の皆様、そして、多文化講師として研究授業を共にして下さった皆様に、心からお礼を申し上げます。

【参考文献】

- 永井 磁郎『国際理解教育』 第一学習社 1989
 福岡市国際理解教育研究会研究集録 1995
 「21世紀を共に生きる子供が育つ国際理解教育」
 佐藤 郡衛・中西 晃
 『外国人児童・生徒教育への取り組み』教育出版 1997
 大阪市教育センター研究紀要第100号
 「ともに生きる力を育てる教育の創造」 1997
 川崎市総合教育センター国際理解教育研究会議
 「国際理解の本その2」 1997
 宮原 修 『国際人を育てる』ぎょうせい 1998
 佐藤 郡衛・林 英和
 『国際理解教育の授業づくり』教育出版 1998

【指導助言】

- 東京学芸大学海外子女教育センター教授 佐藤 郡衛
 (前川崎市総合教育センター専門員)
 東京大学大学院総合文化研究科助教授 恒吉 僚子
 (川崎市総合教育センター専門員)
 川崎市立玉川中学校長 菊池 武熙
 (元川崎市総合教育センター教育課題研究室室長)
 川崎市立下平間小学校長 柴田 洋吾
 (川崎市立小学校国際教育研究会会長)
 川崎市立東高津中学校長 松田 滋充
 (前川崎市立中学校生徒指導部会長)